岡山医療センターの周産期医療

命の誕生にあたって家族中心のケアを実践

県指定の周産期医療の拠点

岡山医療センターは、突発的なことが起こりやすい妊娠中や分娩時の母子を守る周産期医療に取り組み、その歴史は約半世紀にも及びます。

「早産で生まれてきたり、病気をもって生まれてきた赤ちゃんが地域の産院の先生から紹介されてきます。周産期医療は、赤ちゃんの先々のことまで考えて診る新生児科を中心に、お母さんとご家族、赤ちゃんに幸せになってもらうことを目指す医療」と産婦人科医長の多田克彦医師。

「赤ちゃんは、まずお母さんのお腹でしっかり育つことが重要」と多田医師（左）。中央は影山医師、右は中原医師

岡山医療センターはMFICU（母体・胎児集中治療室）とNICU（新生児集中治療室）の両方を備え、2005年に岡山県から総合周産期母子医療センターの指定を受けました。新生児科・産婦人科・小児外科をはじめ関係各科が協力し、母体・胎児、新生児に高度な医療を提供しています。

総合周産期母子医療センター長である新生児科の影山操医師は「まだしゃべることができない赤ちゃんが、今何をしてほしいんだろう、何を求めているんだろうと考えるようにしています」と、“赤ちゃん目線”を常に大切にしているといいます。また、新生児の手術を担当する小児外科医長の中原康雄医師は、「安全かつ確実な方法でベストを尽くしています」と語ります。

NICUでわが子と面会する夫婦。
岡山医療センターにはNICUが18床、MFICUも6床あり、即座に対応できるようさまざまな機器類も備えられている

妊産婦に寄り添って心のケアも

総合周産期母子医療センターでは、お母さんのための産科医、助産師、赤ちゃんのための新生児科医と小児外科医、必要に応じてバックアップしてくれる他科の医師に加え、看護師、心理療法士がチーム医療を実践しています。

「病棟全体として、妊産婦さんの“想い”を大事にしていきたいですね」と常久幸恵看護師長。自分の赤ちゃんが突然入院することになったお母さんは、心が不安定になるからです。また、NICU専属の松田良子心理療法士は、「お母さんから無理に聞き出すのではなく、自然と話せるような環境づくりを心がけています」と、自身の仕事を“慣れない環境で不安な母親に寄り添うこと”だと表現します。

「最近では出生前診断により胎児期に異常が見つかることが多くなっています。そのような場合、各科で綿密に計画を立て、妊婦さんをはじめ、ご家族にしっかり説明して不安を取り除くようにしています」と中原医師。影山医師は、ご家族が治療計画やケアにかかわるほうが赤ちゃんの術後の経過が良好になるというデータがあるといい、“ファミリーセンタードケア（家族中心のケア）”の重要性を強調します。説明の際には産科医、小児外科医、助産師だけでなく心理療法士も同席し、緊急入院の場合は少しでも早く家族の心が落ち着くよう、重症度にかかわらず速やかに説明を行います。このことが患者さんやそのご家族との信頼関係を強くするのです。

岡山医療センターのNICUは365日24時間いつでも面会が可能です。赤ちゃんの両親や祖父母はもちろん兄弟も入室でき、全国的にも珍しい優しい対応となっています。

「お母さんは退院してから地域で孤立しがち。時には周りのお節介も必要かもしれません」と石野副看護師長（左）。中央は松田心理療法士、右は常久看護師長（右）

ドクターカーも使って産院とも連携

地域の産院の医師とは勉強会などを通して“顔が見える関係”にあり、連携力を発揮しています。救急を要する新生児がいると産院から連絡が入ると、岡山医療センターの新生児専用救急車（ドクターカー）が出動します。新生児専用救急車は、一般的な救急車と同じ造りですが、赤ちゃんを運ぶための保育器が積み込めるようになっているのが特徴です。影山医師は新生児専用救急車に乗り込んで産院に向かい、処置を行ってから岡山医療センターに搬送します。

特に人口に対して病院の少ない地域では、この新生児専用救急車がなくてはならないものになっています。ところが、新生児専用救急車を保有する病院は岡山県内に2施設だけで、岡山医療センターは県域の半分をほぼカバーしているのです。

また、岡山県でNICUを備える医療機関は岡山医療センターを含めて6施設あり、そのすべてが当直医を待機させ24時間体制を敷いています。岡山県としても母体と新生児に手厚い体制を整えているのです。ただ、「今後は医師を疲弊させないようにしながら救急対応を続けるために集約化も必要でしょう」と影山医師は課題を指摘します。

周産期医療のさらなる充実を目指す

ＮＨＯではネットワークを生かした多施設共同研究にも取り組んでいます。例えば産科領域の研究では、妊娠糖尿病にかかった人は将来的に２型糖尿病を発症する確率が高くなることが分かっていますが、母乳育児によって発症を抑えられるという海外のデータがあり、ＮＨＯでも現在検証中です。また、早く破水してしまった妊婦さんに特定の抗生物質を投与すると妊娠期間が延びるケースが見られ、その研究も多施設共同で始まります。

このようにＮＨＯでは、各地域の周産期医療のさらなる充実を目指した連携を続けているのです。

カンファレンス中のNICU看護師たち。ささいな変調も見逃さない

MFICUのスタッフステーション

先進国で初の「赤ちゃんにやさしい病院」に指定

岡山医療センターは1991年、WHO（世界保健機関）とユニセフ（国連児童基金）より先進国で初めて「赤ちゃんにやさしい病院（BFH:Baby Friendly Hospital）」に認定されています。自母乳での育児を支援するなど、母子とその家族が幸せになるためにさまざまな取り組みを進めています。

母と子の強い絆を描いたイラスト入りの「赤ちゃんにやさしい病院」認定証

岡山医療センター（岡山市）許可病床数609床

地域との結びつきの強い急性期総合病院。「今、あなたに、信頼される病院　―病める人への献身、医の倫理に基づく医療への精進と貢献―」を理念に、周産期医療など各領域の拠点病院としても地域に貢献している。